

私のおすすめ

ドイツ語にも方言がある！？

図書

音楽文化教育学科音楽文化教育専攻音楽情報専修 3年 横屋藍

あれは小学校の卒業を間近に控えた頃だったか。こんなにも面白い人種がこの世にいるのか！（もぎぎ氏は別格かもしれないが）というこの本を読んだ時の思いが、私を今ここに連れてきたのかもしれない。もぎぎこと茂木大輔氏は本学の卒業生で現N響首席オーボエ奏者、そしてあの大人気漫画『のだめカンタービレ』の音楽監修を務めた人物である。彼の本に出会った時には、まさか彼が学んだキャンパスに自分も通い、その本を紹介する文章を書くなどちっとも思っていなかった。

本書は留学体験記である。本学卒業後、ミュンヘン国立音楽大学大学院に留学、その後いくつものオーディションを経てシュトゥットガルト・フィルに入団した彼だが、その中でどんな苦勞を乗り越えオケマンとなったのか、現在多方面で活躍するもぎぎ氏形成の過程を見ることができる。また彼が留学した当時のドイツは東西に分断されていたため、東側が「一番近くて遠い国」であることを演奏旅行で実感したエピソードも紹介されており、そのような時代に文化の壁を乗り越え奔走したもぎぎ氏とその仲間たちの日々が描かれている。

よこや あい ● なお、本書を電車の中で読むことはおすすめしません。

しかし、本書はただの留学体験記ではない。何度読み返しても、「あ、このあとあの文章だ」とわかっていても、つい笑ってしまう。中でも私がどハマリしたのは、彼独特の翻訳が楽しめる詠りのある外人との会話部分である。日本語に方言があるようにドイツ語にも地域差があるようで、それをいかにもありそうな、田舎の方言らしい言葉に置き換えて真面目くさって書く彼の文章をぜひ一度体験していただきたい。『(バイエルンの学生と共演した際)「楽器、こわれもしたんこ」「ヤー」(中略)「そりゃ、残念でございもそのん」』とまあ、こういった調子である。

大学に入ってすぐの頃、これまた思い出しただけでも笑ってしまう彼の文章と再会した。ああ、自分も同じ世界に足を突っ込んでいたんだ、楽隊ってなんでこんなにも魅力的なんだろう。そう思わせてくれたもぎぎ氏に感謝しながら、これからもこの世界を楽しみたいと思う。

『オケマン大都市交響詩：オーボエ吹きの見聞録』茂木大輔 中公文庫 中央公論新社 2006 請求記号●J110-071



初めての本

図書

演奏学科鍵盤楽器専修（ピアノ）3年 澤幡優希

私が国立音大に入学して初めて読んだ本はこの、中川ひろたかさんが書いた『べんとうべんたろう』でした。まだ新しくなっていない図書館で、基礎ゼミの一環として行われる図書館案内の時間、個別に図書館を回っていたとき、案内して下さっていた先輩が「あ、この本面白いですよ、絵本なんですけど。」と手に取って見せてくれた本。そこにはベートーヴェンらしき灰色もじゃもじゃ頭の人が小脇にお弁当と箸を抱えている姿が。私も絵本の表紙を一目見て、『この本、すごく面白そう』とってしまったのです。

作中では『べんとうべんたろう』が大好きなエリーゼちゃんのためにおいしいお弁当を作るため、『ダダダーン』とどこか聴き覚えのある運命のような掛け声とともに材料集めに奮闘します。

向かう先は『田園』、美しいはくちょうが泳ぐロシアの湖。お弁当にはショパンのパンやシューマンのシューマイもつめて…。

かわいらしくデフォルメされた音楽家たちがダジャレと一緒にページ中に収められています。

私が小さいころ、私の思い浮かべるベートーヴェンといえ、灰色のもじゃもじゃ頭で、怖い顔をしていて、激しい曲

を作っている音楽家でした。

他にもモーツァルトやショパンなど、超・有名なピアニストは名前だけは知っていたけれど、名前以外は学校の音楽室に飾られている肖像画のイメージしかない…。そんな存在だったのです。

もう少し年を経るにつれ、音楽家だって等身大の一人の人間なんだ！ と思ったり（チャイコフスキーは指揮が苦手、指揮台に立つときには遠目にさえ分かるほどガクガク震え、震えのあまり首が落ちるのではないかという妄想にかられ、指揮をしている最中も左手で首が落ちないように顎を支えたとか）いや、音楽家ってやっぱり変人揃いだ…と思ったり（ナポレオンの妹と恋愛したパガニーニや下品な手紙で名高いモーツァルトなどこちらはエピソードの枚挙にいとまがない）音楽家を身近に感じられる機会は増えました。

この絵本は小さい子どもも名だたる音楽家たちをすぐそばにいるような存在だと思わせてくれる、そんな絵本だと思います。

『べんとうべんたろう』中川ひろたか文；酒井絹恵絵 偕成社 2012 請求記号●絵本/NAK



さわはた ゆうき ● 最近音楽家のヘンテコエピソードを集めることにハマっています